

日韓ユース平和フォーラム

第2回／2023 年報告書

コード番号：	23-NPF-004
助成対象：	平和構築のための日韓ユースフォーラム
助成金額：	2,800,000



【目次】	◇はじめに	p2
	◇要項	p3
	◇参加者名簿	p4
	◇二日目のプログラム記録	p5
	◇三日目のプログラム記録	p7
	◇三日目夜のプログラム記録	p11
	◇四日目のプログラム記録	p12
	◇参加者の感想	p14
	◇共同宣言	p20
	◇資料	
	・ 歓迎の辞：金性済	p21
	・ 講演：小田川興「韓国人被爆者問題から日韓の歴史を考える」	p22
	・ 解説：佐野通夫「＜文科省前＞金曜行動」	p26
	＊ 講演：西崎雅夫「証言から知る関東大震災朝鮮人虐殺事件」	は別冊
	◇会計報告	p28

編集◆日韓和解と平和プラットフォーム 日本ユース作業部会

◇はじめに

2020年7月、日本と韓国の市民団体・宗教団体が結集して「日韓和解と平和プラットフォーム」が結成された。日韓プラットフォームは結成した当初から、日韓青年交流プログラムを共同の課題の一つとして掲げていた。そして2021年、3年間の事業として2022年：韓国、2023年：日本、2024年：韓国開催が合意され、日韓それぞれの事務局とユースプログラム作業部会で準備が始められた。

2022年8月22～26日、韓国のパジュとソウルを会場に、第1回日韓ユース平和フォーラムを開催した。日本側参加者は19人、韓国側参加者は20人。

今年（2023年）8月29日～9月2日、東京を会場に第2回日韓ユース平和フォーラムを開催し、韓国側19人、日本側20人が参加した。青年たちは酷暑のなか、二日目は関東大震災の歴史現場を訪れ、三日目はグループ別に分かれて、①尹東柱資料と高麗博物館、②明治大学登戸研究所、③横須賀基地、④在日韓人歴史資料館、⑤川崎教会・川崎市ふれあい館を訪ねた。その日の夜は、「関東大震災朝鮮人・中国人虐殺犠牲者追悼集会」に参加。そして四日目は、「文科省前」金曜行動に参加……。このような過密な現場訪問プログラムの合間に、日韓の青年たちの間では率直な意見と感想が出され、真摯な議論が交わされた。

私たち日本側も、また韓国側も、2022年、2023年と多くの労力と時間を使い、また庭野平和財団からの助成金を活用して、ユースフォーラムを準備し実施してきたわけだが、私たちが目的として掲げたものが、ほぼ達成できたように思う。その一方、準備過程および実施過程での不十分さと問題点が提起されているが、それらは第3回フォーラムを準備していくなかで克服したい。

今年の第2回フォーラムの最終日、日韓の青年たちは、次のように宣言した。

「これまで自分たちがいかに無知であり、無関心であったかを深く反省し、真実を学ぶ権利を行使し、歴史的証言を継承していきます。／想像力を働かせ、現在も日本社会の中で命の危険と恐怖を抱きながら生きざるを得ない状況に置かれている在日コリアンはじめ、過去から続く政府の過ちにより、痛みを負い続けている人々の深い苦しみを共にします。／現実社会及び、インターネット上でのあらゆる差別と暴力を絶対に許さず、そのような言動があった場合には勇気をもって声を上げます。／様々な違いを抱えつつも、互いを尊重したコミュニケーションを続け、対話に開かれた社会を築いていきます。／内面化されている自身の加害性に向き合い、国籍や性別、バックグラウンドにかかわらず、すべての人の命と尊厳が守られ、誰もが個人として尊重される社会を日常生活の中で実践していきます。／力による支配を拒否し、軍事ではなく市民による平和外交を進めていくために、互いに協力して実際に行動をします。」

私たちの「3年事業」の最後となる2024年第3回フォーラムにおいては、日韓の青年たちによる、青年たちのための、新たなネットワークが生まれることを願っている。

2023年12月
日韓和解と平和プラットフォーム

◇要 項

<日韓ユース平和フォーラムの目的>

○日韓の近現代史の現場を訪ね、その時間と空間を体験してみる。

○韓国の青年たちと、日本のこと、韓国のこと、日韓の歴史のことなどを率直に話し合いながら、

日韓それぞれに、夢と希望をもてる社会にするために何ができるか、共に考える。

○東アジアの和解と平和、世界の平和のために何ができるか、韓国の青年たちと一緒に考える。

<概要>

◇主 催 : 日韓和解と平和プラットフォーム

◇開催日程 : 2023 年 8 月 29 日（火）～9 月 2 日（土） 4 泊 5 日

◇開催地 : 東京・神奈川

◇宿泊と会場 : 国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

◇青年参加者 : 日本側 20 人＋韓国側 18 人

◇スタッフ : 日本側 8 人＋韓国側 2 人

《DAY 1 8 月 29 日（火）》

時間	プログラム
16:00～17:00	①開会式 あいさつ：金性済／比企敦子／キム・ギョンミン／イ・ナヨン ②オリエンテーション
18:30～19:20	アイスブレイク
19:30～20:30	交流会

《DAY 2 8 月 30 日（水）》

10:00～15:00	スタディツアー「関東大震災の歴史現場」 現地講師：西崎雅夫さん
18:30～19:30	講演：小田川興さん「韓国人被爆者問題から日韓の歴史を考える」
19:45～20:45	分かち合い

《DAY 3 8 月 31 日（木）》

グループ行動 9:00～18:00	①尹東柱資料→高麗博物館 ②明治大学登戸研究所 ③横須賀基地 ④在日韓人歴史資料館 ⑤川崎教会・川崎市ふれあい館
18:15～21:00	関東大震災朝鮮人・中国人虐殺 100 年犠牲者追悼集会に参加（文京シビックホール）

《DAY 4 9 月 1 日（金）》

9:00～12:00	「声明文」起草
12:00～15:00	グループごと昼食と自由行動
16:00～17:00	「文科省前」金曜行動に参加
18:00～20:30	Farewell Party（日本キリスト教会館）

《DAY 5 9 月 2 日（土）》

10:30～11:30	閉会式（イグナチオ教会岐部ホール） ①日韓青年ひとことメッセージ ②共同声明朗読 ③閉会あいさつ：中井淳／光延一郎
-------------	--

●参加者名簿

- 日本側●
- | | |
|-------|-------------------------|
| 半田歓喜 | 早稲田大学大学院学生 |
| 柳川朋毅 | イエス会 社会司牧センター |
| 大倉桃香 | 白百合女子大学 |
| 大和泰彦 | 神戸学生青年センター |
| 阿波加舞弥 | (新潟) |
| 永松未有 | 白百合女子大学学生 |
| 木村綾花 | 白百合女子大学学生 |
| 池淵わかな | 白百合女子大学学生 |
| 菱山南帆子 | 許すな！憲法改悪・市民連絡会 |
| 韓宣榮 | 在日大韓基督教会大阪教会 |
| 孔瑞羅 | 佛教大学社会福祉学部学生 |
| 鶴山祐子 | 公益財団法人 日本 YWCA |
| 石原光夏 | 児童発達支援指導員／日本バプテスト連盟 教会員 |
| 嶋田健治 | 日本バプテスト連盟 日韓・在日連帯特別委員会 |
| 野添裕美 | 白百合女子大学学生 |
| 相原更紗 | 日本山妙法寺信徒 |
| 李耕守 | 国際基督教大学学生 |
| 濱川怜香 | 桜美林大学学生 |
| 鴨下祐一 | 日本山妙法寺 |
| 柳下李裕理 | 北海道大学大学院生 |
- 日本側スタッフ●
- | | |
|---------|-------------------|
| 金 性 済 | 日本 NCC 総幹事 |
| 藤守義光 | 日本 NCC 総務 |
| 柳 時 京 | 日本聖公会司祭 |
| チェ・イエリン | 一橋大学大学院留学生 |
| 高野 聡 | *三日目横須賀訪問コーディネーター |
| 比企敦子 | 日本 NCC 教育部 |
| 中井 淳 | 日本カトリック神父 |
| 佐藤信行 | 在日韓国人問題研究所 |
- 韓国側●
- | | |
|-----------|---------------------|
| キム・ジエ | 苦難共に |
| キム・ミンソ | 正義記憶連帯連帯運動局インターン |
| キム・ミンスン | 韓国カトリック司教会議 |
| キム・ソヨン | 韓国 YMCA |
| キム・スミン | 韓国 YMCA |
| キム・ジンソン | PEACE MOMO |
| ナム・ギピョン | 韓国基督教教会協議会 (NCCK) |
| パク・ミンジュ | 韓国進歩連帯 |
| ソ・ハンナ | 韓国カトリック司教会議 |
| シン・サンウ | 韓国 YMCA |
| オ・ウンギョン | 大学 YMCA |
| イ・ナリ | 韓国 YMCA |
| イ・ソン Chol | NCCK 人権センター |
| イ・スンヨン | アジア平和と歴史研究所 |
| イ・ユジン | 正義記憶連帯連帯 |
| イ・ジェソン | 興土団 |
| イ・ジョンシム | 韓国カトリック司教会議 |
| イ・テジュン | アジア平和と歴史研究所 |
| チュ・テミン | ウリハッキョと子どもたちを守る市民の会 |
| ハン・ヒス | 韓国 YMCA 全国連盟 |
- 韓国側ゲスト●
- | | |
|-------|---------------------------------|
| 金 敬 敏 | 日韓プラットフォーム韓国書記／韓国 YMCA 全国連盟事務総長 |
| 李 娜 榮 | 日韓プラットフォーム韓国運営委員／正義記憶連帯理事長 |

◇二日目のプログラム記録

《スタディツアー「関東大震災の歴史現場」》

現地講師：西崎雅夫さん（一般社団法人 ほうせんか理事）

◇西崎さんの講演内容メモ

「証言で知る関東大震災 朝鮮人虐殺事件」

- ・ 1923 年 9 月 1 日 地震発生
- ・ 流言飛語が広まる
→警察の電報／新聞の発行／政府の電報（1923 年 9 月 3 日） 電報を広めた理由いまだにわかっておらず、、
- ・ 流言飛語により自警団結成 →朝鮮人を殺害
チョ・インスン（生存者）／水野明善／シン・チャンピョン(生存者)・・・による証言
- ・ 1982 年 9 月 遺骨発掘作業
しかし、発見されず
- ・ 1923 年 11 月 遺族が現場に訪問→警察が妨げた（遺骨の発掘）
→トラック 3 台分の遺体（新聞での報道 1923 年 11 月 15 日）
→今も掘り起こした遺体が何処にあるのか知らされていない
- ・ 荒川に追悼碑を立てようとしたが、国有地だったため許可を得られなかった
→荒川周辺の私有地に追悼碑を設置
- ・ 西崎さんの考え
→加害の歴史を隠す日本
→加害の歴史を知るためには証言が有効
- ・ 公的記録に残っている自警団による虐殺
→実刑率が低い →民族差別裁判
- ・ 公的資料にある軍隊による虐殺事件
対比
＜目撃談＞
①下江戸川 ②大島 8 丁目 ③丸八橋
④永代橋(目撃談はないが絵が残っている)
- ・ 公的資料に残っていない軍隊による虐殺事件

＜目撃談＞

- ①奥戸橋中学校郷土クラブ
- ②亀戸警察署内
- ・ 帰還した生存朝鮮人 日本軍と警察による脅迫
＜＝＞政府が存在する中国
- ・ 主に橋での虐殺
なぜ→川にそのまま流せる、証拠が残らない
→正確な犠牲者数確認不可
- ・ 現在の日本政府：朝鮮人虐殺事件に対する政府の責任はない。
なぜ→政府に残っている記録が無い
- ・ 一つ一つの日撃談が非常に具体的で生々しい
事実であると信じている ●記録＝野添裕美

◇プログラム内容

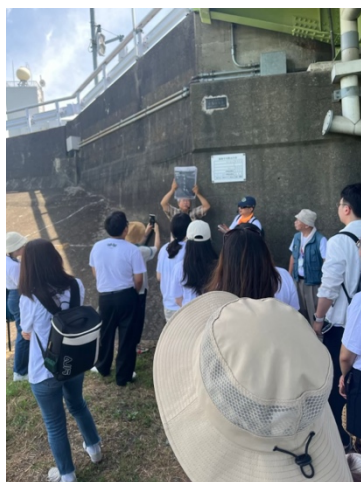
1. 「八広地域プラザ」にて、西崎雅夫さんによる講演
2. 西崎さんの案内で、①荒川土手・旧四ツ木橋たもと（虐殺現場）、②木津川橋辺（死体仮埋葬現場）、③韓国・朝鮮人殉難者追悼碑
3. 東京都立横網町公園の①復興記念館、②朝鮮人犠牲者追悼碑、③東京都慰霊堂
4. ①安田庭園、②旧御蔵橋跡（虐殺現場）

西崎雅夫さんが今までされてきた活動の中で集めてこられた多くの証言、事例を聞いた。そして、その当時の人々の声に耳を傾け、関東大震災時に起きた真実を確かめた。この証言は本人からではなく、受け継がれたバトンを引き受けた西崎雅夫さんにより、今回の交流プログラム参加者一人ひとりに受け継がれた。この受け継ぐ大切さに改めて気づかされた。

◇感想

「関東大震災で朝鮮人・中国人の虐殺があったことは実証されてるんですかあ？証拠はあるの？証言だけではダメだよ」（「Yahoo!知識袋＝2013年8月28日の書き込み」）。

しばしば、日本において証言を真実として受け止めず、否定的受け止め方をする人がいる。それらの言葉がネットに上がり、様々な混在した情報が



が世界にはまわっている。

様々な情報が流れ続け100年がたった今、100年前の記憶を現場から引き起こし、その100年前の虐殺に直視する時間を持てた。現場に実際

に足を運び、当時の状況を想像し、当時を直視することはとても苦しく、しんどいことだった。また、当時の悲惨な虐殺が当時のものとしておさめられるものではなく、現代にも大きく結びついていることを知ったときはより恐怖を感じた。未だに日本政府は当時の「朝鮮人・中国人虐殺」について多くのものを隠蔽し続けている。その隠されたものが多い中で、多くの証言をもとに一つの真実を見出す西崎雅夫さんの活動は大切なものであると感じた。

その西崎雅夫さんが、当時現場を見た人から聞く証言は私が最後で、それを受け継ぐ必要があると語った。この言葉を聞いたときに、私自身ができることは何なのか？と考えさせられた。そして、語られた言葉を真に受け止め、私自身も語れるものとなり、混在した言葉がある中で一つの真実をもって平和な世界を作り出すことが出来たらと思った。

●記録＝李耕守

《講演》

小田川興さん「韓国人被爆者問題から日韓の歴史を考える」

◇講演内容

1. 韓国人被爆の歴史的背景

韓国人被爆者の正確な数は分かっていない。韓国原爆被害者協会は広島で5万人。長崎で2万人とみている。この数は被爆者総数の1割になる。

2. 帰国被爆者達の苦痛と訴え

韓国では被爆者への理解が少なかった。韓国政府も被爆者への支援は消極的だった。更には、貧しさのため医療へのアクセスが困難であった。広島・長崎から韓国へ帰国した被爆者数は2万3千人とされている。

3. 援護獲得へ立ち上がった被爆者たち

―裁判闘争が国家補償への道を開く

韓国から日本へ密航した被爆者が日本において裁判で勝利し、被爆者手帳を韓国の被爆者たちにも交付させる。96年にはハプチョンに被爆者福祉会館ができた。

北朝鮮にも現在382人の被爆者の生存が確認されている。

――小田川興さんは元朝日新聞のソウル支局に居た方で韓国の事情に精通している方だと思いました。韓国被爆者の方との出逢いがこの問題に関わる大きなきっかけとなったということでした。

●記録＝鴨下祐一

◇韓国に帰国した被爆者たちの苦痛

- ①原爆後障害（放射能による内部被ばく）
- ②健康悪化による生活苦（体調が悪くて働けないことで貧困状況に陥る）
- ③日常生活で偏見と差別の対象

原爆によって韓国が植民地支配より解放されたという見方が韓国社会に強くある中、原爆の被害についての情報が乏しく理解が得られず帰国者たちは苦しんだ。

韓国政府は 2016 年より「原爆被害者支援特別法」を制定し、被爆 1・2 世の健康・生活実態調査、医療支援、祈念事業などをおこなっている。

ただ日本政府は、治療目的で来日の在韓被爆者に対する被爆者手帳の交付には踏み切ったもの

の、未だ韓国人被爆者の健康・生活実態調査はおこなっているっていないとのこと。

——大変分かりやすく韓国人被爆者のことと、そこに連なる日韓問題についてお話ししていただきました。

●記録＝石原光夏

◇三日目のプログラム記録

《グループ行動①》 尹東柱資料⇒高麗博物館

私たちは、午前中に立教大学に行き、詩人である尹東柱（ユン・ドンジュ）の生き様を感じ、学びました。尹東柱は立教大学に留学するために来日しました。2 年目は京都府の同志社大学に編入しています。しかし、その後、朝鮮人だからという理由で逮捕され、1945 年、福岡刑務所で亡くなりました。立教大学には、尹東柱に起きた理不尽な出来事を現代に残すために、義務教育で学ばないこの歴史を学生に伝えるために、大学時代に書いた詩のレプリカや、彼が授業を受けた教室、成績表などが残されています。食堂は一度建て替え工事がされましたが、尹東柱がいた頃の装飾に戻されたようです。

私はこの立教大学での尹東柱の歴史に対する取り組みを知り、このような活動の大切さを痛感しました。日本の教育では教えられない、この朝鮮人虐殺の問題。多くの学生はこの事実を知りません。だからこそ、大学の歴史を学ぶと共に、朝鮮人虐殺の問題をも学び、少しでもこの問題について知り、考え、行動できる人が増えると良いと感じました。そして、立教大学に留まらず、様々な人々にこの取り組みが届くと良いと思います。

午後には、高麗博物館に行きました。ここには、関東大震災絵巻が展示されていました。この絵巻には関東大震災で朝鮮人や中国人が日本人に虐殺されている様子が鮮明に描かれています。



この絵巻が一般公開されることははじめてのことです。ここまで、明確に虐殺の事実が描かれているにもかかわらず、この事実を認めない日本政府に対し疑問を感じました。また記録の大切さ、特に絵による記録の素晴らしさを感じました。この高麗博物館には、この絵巻の他に、パネルの展示もありました。しかし、これらのパネルは日本語のみの記載でした。訪れる人の中には、日本語が読めない人もいます。そのため、パネルの内容を理解することは困難です。しかし絵巻だけは理解し、注意深く鑑賞していました。老若男女、国籍を問わず、理解できる絵は正しい歴史を読み解き、国境を越えて連帯するためには欠かせないものです。今回、博物館で展示されていた絵巻は、関東大震災で起きた悲劇の真相を確かなものにし、解決に導くための大きな一歩になると信じています。

●記録＝大倉桃香

《グループ行動②》 明治大学登戸研究所

登戸研究所。「日本の頭脳」「秘密研究所」と言われたここは、敗戦の日に長年の研究のすべての書類が燃やされたという。

「あの時間はなんだったんだろう」と締めくくられたアニメーションを観てから見学は始まった。

沖縄にもこの出身の兵隊を送り、住民をだまし多数の死者を出す原因になった陸軍中野学校、通称「スパイ学校」とも特に繋がりが強いと言う。

そして人を「丸太」と呼び、中国で人体実験をしていた「731部隊」とも繋がりが強い。

1000人近く働いていた人は家族にも秘密、働いている人同士でもお互いが何をしているか知らなかったという。

始めは電波兵器を開発していたが失敗、その後風船爆弾や偽札、毒、暗殺武器、秘密・新兵器などが研究されていた。

私が印象的だったものを大きく二つ紹介したい。

一つは、日本の紙幣印刷技術の歴史がここから始まったということ。科学や技術の発展は戦争によって大きく発展するのはよく知られていること。登戸研究所で「バレない」偽札を「忠実に」造るため印刷技術は発展し、今の透かしやホログラムはそのときから行なわれていたという。戦争や殺戮の延長線上に私が立っていることを実感させられる。

二つ目は、ここの人々は戦犯を逃れたということ。朝鮮戦争で復職し在日米軍に協力した人、その後アメリカに渡った人などがいたという。つまりここでも技術や研究内容がきつと今の米軍に引き継がれているということ。「毒ガスの島」と言われた大久野島（広島県）もアメリカが毒ガス技術を使いたいがために罪に問われなかったと聞いた。次の殺戮につながっていくこの偽りの戦争責任は一体何なんだろう、と思ってしまう。この研究者だった伴さんは、地元の歴史を手繰り始

めた高校生と出会い時間を重ねる中で、話すつもりがなかったここでのことを語り始めたという。

私の祖父は沖縄戦に送られ、弾を胸に受け帰ってきた。語りたがらず「生き残って申し訳ない」「沖縄の人は優しかった」という言葉だけ孫の私に伝わっている。「ありったけの地獄を集めた」という沖縄戦の混乱の中、祖父が人を殺しているかもしれないことも、沖縄の人を虐げることも容易に想像できる。

戦後、日本人一人一人が自らの加害、被害も見つめて認め、あの戦争はなんだったのか、という時間や機会を「奪われ」てしまったのは、今に続く悲劇だと思う。（自らつくるもの？ まだわからない。）



戦争経験者一人一人の心に重く残るもの、たとえばその人々がこの世を去っても、それが脈々と言葉にできない黒い石みたいなものとして、次々とこの国に生まれる私たちの心に受け継がれていると感じる。

それは朝鮮人虐殺もそう。だから今を生きる私たちは78年経っても100年経っても「今」から丁寧に学び直さないといけないと実感させられた。容易に今もそれが起きてしまうと想像できてしまうから。

それと「あり得ない」ではなく、虐殺する日本人の一人だったかもしれない、黙殺する一人だったかもしれない、もしくは殺されていたかもしれない、何に使われるかは知らず風船爆弾の風船を

せつせと作る女学生だったかもしれない、お国のためと熱心に人を殺すための研究に勤しむ一人だったかもしれない…。「当時の人の立場を想像し立たないと絶対に見えてこない、間違える」と言った宮古島の歴史家の方の言葉。それを真ん中に置いて学び考え続けたい。

《グループ行動③》 横須賀基地

港からヨコスカ平和船団のボートに乗せてもらい多様な戦艦そして原子力空母を目と鼻の先に説明を受けました。その大きさと異様さに圧倒されるばかりでした。周囲の山肌には弾薬庫の扉が見えたりと市街地の穏やかな雰囲気とは裏腹にここが軍事基地であるということ、すなわち市民の生活の場と隣り合わせであることを実感します。いわゆる“自由で開かれたインド太平洋”のため、アメリカに限らずさまざまな国旗を携えた戦艦が出入りしている光景も印象的でした。戦艦に46m以上近づくと攻撃対象とされ、まれに戦艦から銃を構えられることもあるという常に緊張状態な現場を見学しました。



横須賀の街に降り立ち、現在の観光拠点であり以前は歓楽街でもあったドブ板通りをはじめ旧海軍下士官兵集会所跡、海軍建築部請負工事殉職者弔魂碑のある良長院などを訪れました。横須賀は、強制労働のために、分かっているだけでも6000人近くの朝鮮半島出身者が強制連行された場所であり、軍港都市建設のために日本人も含めひどい環境のなかで働かされていたということを、(横須賀市民法律事務所 弁護士の) 呉東正彦さんより伺いました。

三笠教会では非核市民宣言運動・ヨコスカの皆さんによるレクチャーと交流の時がもたれました。湾岸戦争・イラク戦争開戦の際、先制攻撃の

登戸研究所、もう一度行きたいと思います。皆さんにも是非とも行ってほしいです。そして語ってくれた全ての生き証人、それを受け継ぐ人にお礼が言いたいです。ありがとうございます。

●記録＝相原更紗

道具として使用された巡洋艦の母港が横須賀であることや2027年度の安全保障関係費はGDP比2%規模で、これは世界第3位の軍事大国になることを意味すること等を教えていただきました。日本には核を「持たず、作らず、持ち込ませず」という非核3原則がありますが、原子力空母の配備は核との同居を意味します。

非核市民宣言運動・ヨコスカの皆さんは署名活動をはじめ抗議運動を続けてこられました。月に一度の月例デモは今月で567回を迎えるそうです。「基地のある街に住んでいるからこそ、平和と緊張緩和のメッセージを他団体と協働して仲良く楽しみながら」「国際連体や女性や若者参加の運動を目指したい」と話してくださいました。

メンバーの新倉裕史さんの「基地問題は一カ所だけ見ても分からない」という言葉が印象に残っています。基地問題は基地のある街で完結しているのではなく、不均衡なパワーバランスなどを背景に他の問題とも関連しあい、地続きになっていると感じました。諸問題のなかには自身が加害性をもって関わっていることがある点を憶え、自分事として向き合っていきたいです。

自衛隊の任務を拡大し、他国を武力で守る集団的自衛権の行使を可能とした安全保障関連法をはじめ米軍と自衛隊の一体化が進んでいます。去る7月16日には日米韓合同演習も行なわれ、着々と戦争をするための準備が進んでいるようです。それぞれの持ち場から行動を起こしていくことが「知った責任」を果たすことにつながるのではないかと考えます。

●記録＝鶴山祐子

《グループ行動④》 在日韓人歴史資料館⇒2・8独立宣言文碑

前日の2日目に復興記念館を訪問したために、グループの意向で3日目は復興記念館には訪問していない。

在日韓人歴史資料館には、膨大な資料を基に、歴史をおって展示されていた。資料として、生活



用具、写真、文献、図書、映像が用いられ、史料中心の立場がとられている。

1905年から始まる関釜連絡船によって、朝鮮から日本に渡航した出来事から展示は始まる。時代背景には、日本に渡らなければならない農民の存在や、労働力を求めた日本政府の影響があった。

それから2・8独立宣言文等の独立・社会・労働運動が行なわれたこと、関東大震災時の虐殺、炭鉱などによる過酷な労働、その時の生活などが展示されていた。太平洋戦争勃発後の強制連行、皇国臣民化教育による日常の束縛があり、日本の敗戦による朝鮮の光復、解放をむかえた。しかし、朝鮮では政治・経済・社会の混乱もあり、解放は、多くの朝鮮人にとって帰国・残留を問わず、差別と貧困を始めとした新たな苦難となったとのこと。

解放後には、差別、偏見のなか、民族の伝統を伝え、固有の存在としてあろうとした姿が描かれている。朝鮮学校の設立や、戦後の補償・福利厚生法律による差別への抵抗、外国人登録法による差別と指紋押捺への抵抗運動の歴史、現代に活躍する人々の展示があった。

この後、在日本韓国YMCAにある2・8独立宣言文の石碑も見学し、2・8独立宣言文の歴史的背景を大和泰彦さんと佐藤信行さんに説明していただいた。

●記録＝嶋田健治

《グループ行動⑤》 川崎教会⇒川崎市ふれあい館

川崎コースでは、実際に川崎市桜本を歩き、朝鮮人差別に対し、在日朝鮮人がどのように闘って来たのかを学びました。川崎教会では山田貴夫さんから「日立闘争以来の川崎市における共生の街づくりの歩み」を学びました。戦後の在日朝鮮人の生活や川崎市内で生活する在日朝鮮人の教育活動、国籍差別撤廃運動などの歴史に触れました。次に崔江以子さんからは、今後の差別とどう闘うのか、今どのような活動、行動をしているかを教えていただきました。

川崎駅前では日の丸を掲げた大きなヘイトデモが何度も行なわれ、そのたびに在日朝鮮人の心は傷ついていくばかりでした。保育園に本名で通うこともできず、いつ殺されてもおかしくない状



況を変えようと日々努力されていることに、感銘を受けました。小学校の運動会で韓国の伝統文化を踊ったり、キムチ作りをしたり、日々の学習に差別を無くさせるような行事を取り入れることで、子どもたちの差別意識は無くなっていますが、

ヘイトデモをする大人たちは、大きな声で「朝鮮人を殺せ」と発言しています。殺したいほどの恨みがあるようには思えませんし、加害者なのは日本人なのではないかと私は思いました。

私の知らないところで、数々のヘイトデモとそれに抗おうと努力する在日朝鮮人の方々の行動

があったと思うと、自分の無知さに悔しく思いました。やはり、学ぶこと、知ることが大切なのだとここで学ぶことができました。

●記録＝濱川怜香

◇三日目夜のプログラム記録

《関東大震災朝鮮人・中国人虐殺 100 年犠牲者追悼大会》

中国東方文化芸術団による挨拶で、犠牲者追悼大会は幕を開けた。次は、韓国朝鮮のブンムルノリと歌により、今や失われた祖国の地へと思いを誘われた。

かつて、「日本国民」として朝鮮人を排除することが使命とさえ謳われていた日本の過ちの反省を実行委員会共同代表、田中宏さんが述べた。

ほうせんか理事の慎民子さんから、その昔、在日コリアンとして「自分が殺される」恐怖の中、その中をいかに生き抜くか。その苦難の歩みを自伝とともに語って頂いた。

また、その痛みの歴史は在日コリアンだけのものではなく、在日中国人のものでもあり、日本の傲慢な支配の中でいかに人間の尊厳が損なわれてきたのかを、林伯耀さんよりお話いただいた。

遺族代表の韓国側と中国側の訴えの叫びは、その歴史がいかに現在に痛みを残しているのかを感じさせてくれた。

それに対して、日本の政党・政治家から答弁があった。割愛すると、立憲民主党からは、杉尾秀哉さん。国会にて、日本政府が過去に冒した過ちを認めない答弁を繰り返すことを嘆く思いとともに、継続して国会に問うていく決意を表明された。

続く李娜榮さんから、日本が過去の過ちを認知し、積極的な未来を創るための具体的な努力を求めるよう、挨拶があった。さらに正義記憶連帯

は、戦時中の慰安婦問題はまだ未解決であり、日本が国家の責任があることを忘れないよう求めた。

「ヘイトスピーチを許さないかわさき市民ネットワーク」からは、崔江以子さんが現在進行中であるヘイトの嫌がらせや強迫される中にある現実を語っていただいた。川崎市の精力的な反ヘイトスピーチ体制に支えられながらも、それでも危険と隣り合わせにある当事者として現場からの声であった。

崔善愛さんからは「虐殺のエチュード」として解釈された、ショパンの「革命のエチュード」が力強い旋律で演奏された。崔さんは在日コリアンである。人々が平和に共に生きていく未来を願いながら、祖国の愛唱歌である「アリラン」ははじめ「別れのエチュード」でもって追悼の意を豊かに響かせた。

紫金草合唱団と李政美さんの合同合唱は力強く、その歌詞は、雄々しくも悍ましい戦争が簡潔に表現されている。

私も追悼の意を連ねながら、より良い未来へ向かおうとする働きに参加していければ幸いだ。本集会に参加された人々の言動を通して、様々な平和が人々のうちに豊かに体现されることを望むばかりである。

●記録＝韓宣榮

オープニングは、中国東方文化芸術団と韓国京畿民芸総の皆さんからスタート。主催者挨拶は田中宏さん、シン・ミンギヤさん、関東大震災中国人受難者を追悼する会の林伯耀さんの挨拶が続きました。

韓国、中国の遺族代表の方が持ち時間を超えるほどの思いを込めてお話をされていたのが印象的でした。数分では収まらない遺族の思いを感じました。

来賓挨拶では、中華人民共和国駐日本国大使館の楊宇首席公使、在日本朝鮮人総連合会からの発言がありました。

特別報告では、専修大学教授の田中正敬さんが国会の責任について、メディアと民衆の責任についてノンフィクションライター安田浩一さんが、虐殺は自然発生ではない。国家による大仕掛け。人の命と暮らしを守るべきメディアは虐殺に加担した。メディアはそのようなことから目を背けてはならないと発言。

ヘイトクライムの現場から、ヘイトスピーチを許さないかわさき市民ネットワークの崔江似子さんが登壇。ジェノサイドの再来は決して無いとは言えません、と述べて、最近での熊本大震災では自警団ができて鉄パイプを持って外国人を探し歩くといった具体的な話をされてとても驚きました。「殺し殺されない 101 年 102 年のために

どう生きますか？」の問いに、そのような恐怖の中で在日コリアンの皆さんが暮らさざるを得ない状況にしまっている責任を感じました。

東京都の責任について 9・1 関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式実行委員会の宮川泰彦さんが発言されました。

追悼のピアノ演奏を崔善愛さんが行ないました。「朝鮮人大虐殺は大変重いこととして子どもの時から受け取ってきた。今私は新宿の街をチマチョゴリを着て歩くことは想像できない。迫害の危険があるから」とスピーチし、アリランを導入とした別れの曲を演奏。

追悼の歌曲として李政美さんと紫金草合唱団さんが素晴らしい圧巻の歌声を披露。

草の根の報告として、千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会の平形千恵子さん、ほうせんかの取り組みについて代表理事の落合博男さん、神奈川における取り組みとして関東大震災時朝鮮人大虐殺の事実を知り追悼する神奈川県実行委員会代表の山本すみ子さん、中国人受難者を追悼する取り組みとして関東大震災中国人受難者を追悼する会の川見一仁さん、朝鮮人虐殺の記録映像制作を続けている呉充功映画監督が報告し、藤田高景さんより閉会の挨拶で終了。参加者は 1800 人でした。

●記録＝菱山南帆子

◇四日目のプログラム記録

《「文科省前」金曜行動》

金曜行動は朝鮮学校への高校無償化の適用を求めて、2013 年から主に朝鮮大学校の学生たちによって始められ、毎週金曜日に文科省前で集会を行なっている。コロナ禍で一度休止したこともあったが、9 月で 487 回を数える。9 月 1 日は午後 3 時半から 1 時間、関東大震災朝鮮人虐殺 100 年

に際し、大阪の火曜日行動の仲間や韓国、アメリカからの参加者も合わせて約 180 人が集まった。

最初にウリハッキョと子どもたちを守る市民の会代表ソン・ミヒさんをはじめ、韓国から来られた市民団体各代表によるメッセージ。民族教育の保障、祖国の統一を願う魂の込められた叫びに圧倒された。長年にわたりモンダンヨンピルグル

ープをはじめ、多くの韓国市民グループが、朝鮮学校の子どもたちに寄り添い、共に心を痛め、支援活動を展開して下さることは本当にありがたい。

同時に日本の社会全体が朝鮮学校に対する偏見、無知・無関心という気運に満ち溢れている現実。自民族の言語や文化を学ぶという最低限の権利を、私も含めた日本社会が守りきれないことに對し、心から申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

日韓ユース平和フォーラムからはシン・サンウさんと野添裕美さんが発言。自分の生い立ちや体験、この4日間のフィールドワークを通して見たこと、感じたことなどを自身の言葉で率直な思いと問いかけをして下さった。この学生からの切実な訴えに対し、窓も固く閉ざしたままの文科省の人々は果たしてどのように受け止めているのだろうか。

在日コリアン当事者である金性済牧師、大阪のオモニ会代表からの力強いメッセージが続いた。昨年9月、赤羽駅で「朝鮮人コロス会」などというヘイト落書きを目にし、学校や家族に危害が加えられるかもと、親にも先生にも相談できず、1か月もの間、襲撃される恐怖に怯えながら我慢して通学しなければならなかった、という朝鮮学校生徒の話に改めて戦慄し、胸が締め付けられる思いであった。子どもの命と尊厳を守れないような社会に、一体何が出来るというのか。

関東大震災における朝鮮人・中国人虐殺の事実を100年経った今日に至ってもなお認めようとせず、現在のヘイトスピーチ、ヘイトクライム、朝鮮学校差別等が許容される風潮を作り出すこの国の歴代政権と社会の姿勢を考えると、本当に不甲斐なく腹が立って仕方がない。世界から求められ

ているグローバリズム、多文化共生からも正反対の方向へ歩んではいけないだろうと思う。

続いてハワイから来日した在米コリアンの市民団体によるメッセージ。その中で「もしアメリカの日本人学校で、政府からこのような差別的扱いを受けたとしたらどう考えますか」という問いかけがあり、私は幼い頃に海外の日本人学校へ通っていたこともあり、この言葉が頭から離れなかった。始終非常に沈痛な気持ちで立ち続けることになったが、共感できる多くの仲間が存在することは大きな希望である。不当な差別が撤廃されるまで、今回のプログラムで見聞きしたことを糧として、あきらめず輪を広げて共に抗っていききたいと思う。

最後に金曜行動から生まれた歌「声よ集まれ、歌となれ(소리여 모여라 노래가 되어라)」を参加者全員で合唱して終了した。 ●記録＝大和泰彦



◇参加者の感想

●半田歓喜

昨年に続き「日韓ユース平和フォーラム」に参加する機会が与えられました。今年は、関東大虐殺から 100 年という大きな意味をもつ年で、私たちは荒川河川敷の虐殺現場をフィールドワークし、共に犠牲者を追悼しました。

虐殺現場となった隅田川の河川敷を実際に歩くまで、関東大虐殺が 100 年前起こった過去の悲劇と考えていました。しかし、政府によって虐殺の真実が隠蔽され、犠牲者の遺骨が所在不明のままであることを聞いたとき、100 年前の出来事ではなく未だに解決されていない問題であると気付かされました。

また、神奈川県川崎市にある、川崎市ふれあい館に訪問して館長の崔江以子さんから、在日コリアンの方々が受けるヘイトスピーチや、日常生活を送る上で感じる恐怖についてお話を聞きました。ヘイト団体は公園に集まって「朝鮮人は国に帰れ」とヘイトスピーチをしたり、届いた郵便物を開けてみるとコロナの菌付きと書かれたお菓子の包み紙が送られるという脅迫被害を受けてきたことを聞きました。講演の中で印象に残ったのは、ヘイト団体が「ふれあい館」に近づけないよう道路に横になり、ヘイト団体のデモ行進を止めた市民たちがいたということです。共に闘う市民の存在が、ヘイトに苦しむ在日コリアンの方々にとって、励ましと慰めになったと思います。

私は、道路に横になって、ヘイトスピーチをするデモ隊の行進を止めた市民の姿が、ルカ福音書 10 章に出てくる「善いサマリア人」の姿と重なりました。ルカ福音書では、強盗に襲われた人を見て、道の向こう側に行き知らないふりをして通り過ぎる人と、近寄って介抱するサマリア人が登場します。現代においても虐殺の歴史・ヘイト被害を目の当たりにして、歴史を否定し傍観しヘイト

に加担する人がいる反面、真実を明らかにしヘイト被害に苦しむ人に寄り添い共に闘う人がいます。私は、傍観者ではなく自ら歴史や問題を学び、被害に苦しむ人と共に闘い、彼らの隣人（となりびと）になりたいと思いました。

平和を実現するには和解が必要であり、和解のためには日韓の対話を継続することが必要だと感じます。人の心のうちにある偏見が、ヘイトやジェノサイドとして表出することを防ぐために、平和を実現する者として「対話」「連帯」を継続していきたいです。

●鴨下祐一

日韓ユースフォーラムからすでに一月以上が経過しました。記憶の棚の奥の方にしまわれてしまった思い出も多いですが、何とか思い出してみようと思います。

今回、日韓ユースフォーラムに参加することを機に参加前に小説「パチンコ」を読みました。

私自身の生きてきた中で在日朝鮮人という言葉はどこか遠いもので、日々の生活の中でそこまで意識して交わることのない存在でした。

昭和の終わりの東京で生まれた私にとっては良くも悪くも在日朝鮮人に対しての直接的な差別心を植え付けられる機会は無かったように思います。

しかし 30 歳近くになり、沖縄に住み始めたことで、沖縄の問題を通して韓国の人たちとも交流を持つようになり、戦時中の慰安婦や強制連行、また、戦後の在日朝鮮人差別、朝鮮戦争等を知ることになりました。

以前より、関東大震災での朝鮮人虐殺があったことは知っていました。しかし、それが自分の中でリアリティを持っていませんでした。今回、ユースフォーラムを通して当時の証言を聞き、遺族

の言葉に触れ、歴史を学び直し、韓国から来た人たちが在日朝鮮人の方たちと数日間、時間を共に出来たことで、これらの問題が私の胸中の大きなパートを占有するようになっていきます。

昨日、映画「福田村事件」を観ました。人が人を区別し、蔑み、残酷に傷つける内容に気分が悪くなり、しばらく立ち直れませんでした。

ユースフォーラムで文科省の前に行き、朝鮮学校の無償化を訴える抗議行動に参加しました。

大きな声で訴え、叫ぶ声に、戦前、戦後を通して、彼らがどれだけ虐げられ、苦しめられてきたかを、日本社会は、感じる事ができず、理解することができず、共感することができていないという事実には非道性を感じました。

私たちの眼前で、怒り叫ぶ人たちがこそ本当の人間であり、無関心で見て見ぬふりをし、加害者側でありながら共感できない者たちは、人間としてあまりにも未熟であると感じました。

今回気づいたことは私が在日朝鮮人の歴史や現実を知り、学ぶことで感じる胸中の重い感じは、日本人または日本社会が抱える加害者としてのトラウマではないかと思うようになりました。私は自分が属する社会が過去から現在に到るまで加害者側であることに、罪悪感を抱えながら、自身の無知を恥じながら、決して消すことの出来ない罪業に、例えば苦い薬を口に含みその苦みがしばらく残るような。しかし、日本社会の加害の罪に気づいた者はおそらく、生きている限り、その痛々しい重荷を持ち続けていくものなのだと、今は思っています。

●鶴山祐子

自分たちの足で実際に現場を訪れお話を聴きながら、100年前の今日この場所で想像を絶する虐殺がおこなわれたという史実を知り、想起できたこと。そして何よりも国や地域を越えたユースや活動家たちとの出会いと、未来に向けてそれぞ

れの視点から意見を交えられる機会に参加できたことは大変貴重な経験となりました。感謝いたします。

特に何名もの方が共通しておっしゃっていた「これは過去に起こった出来事ではなく、今現在も地続きになっている問題である」という言葉が印象に残っています。その言葉の重みに自分ごととして向き合いたいという想いを持ったのと同時に、これまでの私自身がいかに他人事として目を背けていたかという事実にも気づかされました。

何事も「知る」から始まる一方、時には恐ろしく感じたり責任も伴う重みのある行為かとも思います。そうであるからこそ誰かと互いに手を取りあって一步一步、複眼的な視点で歴史と向き合い、これからについて共に考える歩みを進めていきたいと強く思いました。

虐殺とは正反対という意味でも「武力に頼らない平和」「誰もが尊重され安心して生きていける社会」の実現のためには、それを目指す一人ひとりこそが、自分の立っている場所から多様な背景を喜び尊重し合うことを、具体的な行動として実践していかなければならないとも思いました。当プログラムをはじめ、開かれた場づくりとその場に参加する誰にとってもセーフな空間を創造していく努力の必要性を実感します。他ならぬこの社会に生きる私たち一人ひとりがそれぞれの持ち場から実現していくことは、今回の学びを活かすことであるとも考えます。

プログラムを通して、もしまた同じ状況になったとき解釈の暴走に振り回されず「個」を保ち、悲劇を繰り返さない自信が自分にはあるのか？ということが何度も問われました。首都圏では30年以内にマグニチュード7以上の直下型地震が来ると言われています。今回出会えた皆さんと今後もさまざまなカタチで連帯し続け、真の和解と平和に向かい共に進んでいきたいです。

●嶋田健治

私が所属している日本バプテスト連盟日韓・在日連帯特別委員会から誘いがあり、このたび、フォーラムに参加させていただきました。日本と韓国から様々な人たちが集まり、これからの平和について考えていくことに期待し、参加させて頂きました。

しかし、実際には、知見のある者が、若者に教えるというセミナーのような構造が多くみられました。日韓ユース平和フォーラムの目的は、「体験する」「話し合う」「考える」ということが念頭におかれていたはずですが、参加者同士の話し合いや、分かち合いの時間、出会いの場が極端に少なかったように思います。

そのような中、講演やフィールドワークの時間は貴重な時間でありました。講演では、多くの命という視点ではなく、1人ひとりの人生があったことを思い起こし、数字ではなく尊い人生が奪われてしまったことに思いを巡らせることができました。そして、実際に、現地に赴くからこそ得られる具体性や、地に足をつける現実性を帯びる時間でありました。またフィールドワークもそれぞれの関心に合わせて選択できたのも、より日韓関係についてふかく考察できるきっかけとなったと思います。

それ故に、1つ1つの学びを丁寧に分かち合う時間を持ち、フォーラムができればよかったと思います。参加者を「若者」とまとめるのではなく、それぞれの参加者と向き合っていたかったです。

また、グラウンドルールがあったにも関わらず、それぞれのバックグラウンドを蔑ろにして、公の場で人を傷つける発言もところどころみられました。すべての人間には、1人ひとり違うバックグラウンドがあります。そのような違いがある人たちが集まっていました。その違いによって考えることもありますし、その出会いによって人生が変えられることもあると思います。互いに耳を傾け、聞き合い、言わなくても通じる言葉がありま

す。自分の人生の中でどうすれば平和を造り出す人々の1人になれるのか考える機会になれば幸いです。

●李耕守

交流を通し、歴史的事実に対する否定的目線ではなく、批判的な目線で疑問を持ち、問いをたて、これからどのような歩みをするか、日韓の和解を実現させられるか、またあらゆる人が共に生きられる平和へと結びついていくのか、を考える時間を持つことが出来て、とても充実した実りある豊かな時間を過ごすことが出来たことに感謝です。

関東大震災大虐殺から100年がたった現代においても、在日コリアンの人々が命の危機にさらされている事実には驚きと悲しみ、また怒りに近いような感情も湧きあがってきました。

命の危機に直面しているのは決して在日コリアンだけでなく、人それぞれが持つアイデンティティ、人種、民族、性別などによる違いによっても同じようなことが言えるかもしれません。私はこの違いというものが社会をより豊かにするものであると思っています。違いがあるからこそ、諸問題に対してあらゆる角度から見、考え、対話し、より違いを持ったもののどうして共に生きられる社会を作ることが出来ると感じるからです。そのため、今回の交流は人それぞれ違う専門を持った者が集まり、対話ができ、とても勉強になりました。そして、対話を重ねる中で、自分ができる平和へのアプローチは何か考えさせられ、自分が持つアイデンティティは何かあらためて考えさせられました。

私は日本で生まれ育った韓国人です。私はこのことに大きな意味を感じています。両側面を持った自分だからこそできる何かがあると思います。その何かを模索し続け、和解にちょっとしたきっかけを与えられる一人になればと思います。

●大倉桃香

今回、東京にて開催されました日韓ユースフォーラムに参加しました。私は、今回参加し、学んだことが大きく二つあります。

一つ目は、自分の故郷である東京の歴史を深く知ることができました。私は東京で生まれ、育ちました。しかし知らないことばかりです。それは、普段当たり前のように訪れている場所は、私の日常であり、学びの場と捉えていなかったからです。プログラムの中で、西崎さんにお話を伺える機会がありました。西崎さんは、関東大震災の発生後に起こってしまった朝鮮人虐殺の歴史について研究、調査されている方で、そんな方と一緒に東京の街を歩き、写真と共にそこで起きてしまったことをご説明してくださいました。そして、朝鮮人虐殺は地震のパニックで起きたことではない。政府やマスコミが流したデマがきっかけで起きたこと。このことを西崎さんは強く訴えておられました。このような事実がある中、日本政府は一切認めようとせず、記憶から消し去ろうとしています。私は、西崎さんのお話を聞き、発信された情報をすべて鵜呑みにしてはいけなと強く感じました。現代、SNS が浸透し、簡単に世界中の情報を得ることができます。だからこそ、情報の発信源を確認すること、本当の事実なのかと疑問を抱くこと、自分でもしっかりと意見を持つこと、これらが大切になってくると思います。改めて情報の得方、扱い方を考えていかなければならないと思いました。

二つ目は、チームに分かれて訪れた立教大学での学びです。立教大学では、詩人である尹東柱さんの生き様を感じ、学びました。尹東柱さんは立教大学に留学するために来日しました。2年目は京都府の同志社大学に編入しています。しかし、その後、朝鮮人だからという理由で逮捕され、福岡刑務所で亡くなりました。立教大学には、尹東柱さんに起きた理不尽な出来事を現代に残すため、また義務教育で学ばないこの歴史を学生に伝えるため、大学時代に書いた詩のレプリカや彼が授業を受けた教室、成績表などが残されています。

食堂は一度建て替え工事がされましたが、尹東柱さんがいた頃の装飾に戻されたようです。私はこの立教大学での尹東柱さんの歴史に対する取り組みを知り、このような活動の大切さを痛感しました。

日本の教育では教えられない、朝鮮人虐殺の問題、多くの学生はこの事実を知りません。だからこそ、大学の歴史を学ぶと共に、朝鮮人虐殺の問題をも学び、少しでもこの問題について知り、考え、行動できる人が増えると良いと感じました。そして、立教大学に留まらず、様々な人々にこの取り組みが届くと良いと思いました。

今回も昨年に引き続き、素晴らしい学びの場を作ってください、ありがとうございました。今回の学びを私の中に留めておくのではなく、周囲に発信し、日韓の問題が少しでも改善されると良いと思います。

●菱山南帆子

今年も日韓ユースフォーラムに参加しました。

今年は関東大震災 100 年の節目の年でした。100 年前の大震災時に震災で亡くなった方たちだけではなく、日本人によって大勢の在日朝鮮人、中国人が殺されました。

その虐殺を扇動したのが時の日本政府によるものだったということを学び、とても驚きました。非常事態でのパニックを利用し、政府による差別扇動により間違った正義感を持った市民らによる自警団が結成され、残虐な虐殺が繰り返されました。

それをひた隠し、100 年目の今になっても官房長官が「虐殺は無かった」と言い切ってしまうことに日本の隠べいの歴史の罪深さを思いました。

今回の日韓交流を経て、前回に増して歴史の話、そしてジェンダーの話ができたこと、希望に思います。日本政府は軍拡路線にひた走り、平和外交よりも軍事圧力に力を入れていることに不安を覚えます。武力ではなく今回のような市民の対話と国境を越えたつながりで私たちの未来を戦争

の物語ではなく、平和の物語へと転換していきたいと思いました。

●大和泰彦

今回は関東大震災朝鮮人・中国人虐殺から 100 周年という大きなテーマであり、実際に歩いて学び、共に語り合うことが出来て、私にとっては本当に有意義な内容でした。見たもの、印象に残った場面が多く、今に至るまで自分の中で整理しきれていないような気がします。しかし、個人的に、参加者同士で事前学習を重ねた結果、より多くのことを吸収できたと思います。同時に 100 年前から現在に至るまで、日本社会に横たわる大きな問題の数々を改めて投げかけられたような気がしました。プログラムは非常にタイトだったにも関わらず、大きなトラブルや急病人もなく無事に終了できたことは本当に良かったです。計画から実行に至るまで関わって下さった、参加者の皆さん 1 人 1 人、日韓スタッフの皆さんに深く感謝申し上げます。

慌ただしい日程の中でも、昨年から、また新たに今年から一緒に参加して下さった参加者の皆さんの思いを直接聞く機会を多く持てたことは、大きな収穫であり、希望であると感じます。そして新しい宣言文の草案をみんなで一緒に考えることが出来ました。思いが結集したこの宣言文を自分自身の指針として念頭に置きながら、様々な活動を展開していきたいと思います。

このプログラムは 3 年計画と理解していますが、日本と韓国にはまだまだ私達が見るべきもの、訪れるべき場所がたくさんあります。要望としては、何らかの形で来年以降も継続していけたら嬉しく思います。まだまだ時間はかかると思いますが、将来的には日本と韓国を越えて、朝鮮民主主義人民共和国、中国、台湾など東アジア各地域の宗教団体・市民団体で活動する青年の方々とともに一緒に学び、相互訪問し、和解と連帯の輪を広げていきたいと、私は個人的に強く願っております。

●阿波加舞弥

昨年に引き続いて参加させていただきました。2023 年は関東大震災・朝鮮人大虐殺から百年という大きな節目もあり、東京にて行われました。昨年は韓国パジュにて朝鮮半島が分断された歴史をまなびましたが、今年は日本国内での差別や百年前そこで行われたことなど、政府や公式な場所から隠された「真実」に触れる機会に恵まれました。当時の場所に行くことができ、荒川では特に当時どうだったのかを想像しながら、心が痛くなるところが沢山ありました。人の恐怖を煽り、しなくても良い対立を促され、家族を守るためと正義のつもりで、罪もない命を刈り取ろうとする人々。現代にも通ずるものがあると感じました。知らないから、怖いから、排除するという感情は、外国人に対してでなくとも存在します。知らない事や物と出会った時、どう対処しようとするべきか、より深く真剣に考えなければならないと思います。

そして今回、より安心して参加できたのは、グラウンドルールが設けられていた点にあると思います。ルール違反を感じたら指摘もでき、違反したと気づけば、謝罪や反省が出来ました。明文化されたことによって普段の生活で見落としていた「配慮されるべき点」に気づくことが出来ました。こういった活動をしている身として、他者との関わり方をもっと繊細に、しかし力強く議論していくためにも、平和的でありかつ、安心して自分の意見を表明できる場を創るようになりたいと思いました。

今年もたくさんの参加者の方々と共に話をしたことで、自分の思いや、日常生活でのモヤモヤを共有したり、議論することができました。ここで生まれた繋がりをさらに次のステップへ繋げていけるよう、皆でそれぞれに頑張っていきたいと強く感じました。ありがとうございました。

●石原光夏

私は今回初めて日韓平和ユースフォーラムに参加しました。関東大震災直後に多くの朝鮮人・中国人が虐殺されたということは以前から知っていましたが、どのような経緯で起き、どのくらいの人が犠牲になったのか、そして当時の虐殺現場を見ていた人々の証言を集めたり犠牲者の遺骨発掘と追悼のための活動を長年していたりする方々がいること、今の日本政府の見解や対応等、私がまだ知らなかったことも含めて詳しく知り学ぶ機会になりました。朝鮮人虐殺の大きなきっかけとなったデマの広がり、私の地元のすぐ近くである船橋の無線塔から発信されたことを初めて知り衝撃を受けました。実際に虐殺が起きた現場にも足を運びましたが、自分が知っている今の東京とは全く違う景色が100年前にはあり、多くの朝鮮人たちが苦しめられ命を奪われたことを想像すると心が強く痛み、やるせない気持ちになりました。誰もが簡単に情報を手に入れ共有できるようになった今、フェイクニュースやディープフェイクによるデマ情報が私たちのすぐ身近にあります。どう真実を見極め何を信じるのか。デマの拡大、同調圧力、自身の身や生活が危険に晒される時、不信感と恐怖に駆られる時、必ずしも加害に加担しないと言えるのか。100年前に起きた朝鮮人大虐殺は、終わった出来事では全くなく、現代に生きる私たちに多くのことを問いかけ

ていると感じました。そして朝鮮人大虐殺のことを学ぶことは、自らの内にある加害性や加害者を生まない社会の在り方を考える上で大変重要であると思いました。

フィールドワークで訪れた登戸研究所も強く印象に残っています。優秀なエリートが集められた所とのことで、頭脳をどう使うと兵器になり、どう使うと社会がよくなるのかを考えさせられる場所でした。戦争の裏で行われる秘密作戦の現実は大変衝撃的でしたが、戦争がいかに人間を非人間化させるものかを実感しました。日本の加害責任・戦争責任について改めて考えをめぐらしながら、人間の尊厳が奪われるあらゆる暴力行為は絶対に許してはいけなと強く感じさせられる、大変貴重な時間でした。

今フォーラムに参加したことで「平和とは何か」「私の目指す平和は何か」を改めて考えることができました。参加者同士が一緒に学びを振り返り対話する時間が足りなかったことは少し残念でしたが、日韓の平和を目指す仲間と共に朝鮮人大虐殺について学び、私たちの社会について考えることができる機会が与えられたことを嬉しく思います。これからも共存と平和を望む「人同士」で出会い、繋がり、連携し、平和を創り出す人として用いられます。フォーラム開催にあたり尽力して下さった全ての皆さまに感謝申し上げます。

◇2023 年／第 2 回 日韓ユース平和フォーラム宣言文

2023 日韓ユース平和フォーラムに参加した私たちは、2023 年 8 月 29 日から 9 月 2 日まで、日韓の過去と現在について、多くの学びを得ました。とりわけ、100 年前の関東大震災における「朝鮮人・中国人大虐殺」の現場などを共に歩き、多くの証言に耳を傾け、今に続く苦悩や葛藤を想起しました。

今日に至るまで、日本政府は関東大震災時の「朝鮮人・中国人大虐殺」という事実を認めていません。また、韓国政府もその事実を教えていません。

大虐殺が起きたのは、予期せぬ大地震の恐怖の中から日本人の中に内面化されていた差別・排外主義が噴き出したのではないのでしょうか。

日本政府が大虐殺の背景となった差別・排外主義を扇動していたことを学びました。つまり国家仕掛けで行っていたということです。

そのような姿勢は、侵略戦争や、「韓国人被爆者」や朝鮮学校に対する差別的取り扱いへと繋がっています。

私たちはこのような事実を決して無かったことにはさせないように、証言と事実を世代を超えて継承していく責任を感じました。

それゆえ私たちは、以下のとおり宣言します。

1. これまで自分たちがいかに無知であり、無関心であったかを深く反省し、真実を学ぶ権利を行使し、歴史的証言を継承していきます。
2. 想像力を働かせ、現在も日本社会の中で命の危険と恐怖を抱きながら生きざるを得ない状況に置かれている在日コリアンはじめ、過去から続く政府の過ちにより、痛みを負い続けている人々の深い苦しみを共にします。
3. 現実社会及び、インターネット上でのあらゆる差別と暴力を絶対に許さず、そのような言動があった場合には勇気をもって声を上げます。
4. 様々な違いを抱えつつも、互いを尊重したコミュニケーションを続け、対話に開かれた社会を築いていきます。
5. 内面化されている自身の加害性に向き合い、国籍や性別、バックグラウンドにかかわらず、すべての人の命と尊厳が守られ、誰もが個人として尊重される社会を日常生活の中で実践していきます。
6. 力による支配を拒否し、軍事ではなく市民による平和外交を進めていくために、互いに協力して実際に行動をします。

2023 年 9 月 2 日

〈2023 日韓ユース平和フォーラム参加者一同〉

●資料●

歓迎の辞 第2回日韓ユース平和フォーラムの開催を祝う

●金 性 済（日韓和解と平和プラットフォーム日本運営委員会書記）

日韓和解と平和プラットフォームの第2回日韓ユース平和フォーラムに集われた皆さま、このたびの開催を心からお慶びいたします。

2020年7月、コロナ・パンデミックの危機にありながら発足を導かれた日韓和解と平和プラットフォームは、昨年の夏に第1回目の開催を韓国で実施することができました。

このたびは日本開催であります。この第2回目の開催には、昨年と異なるいくつかの立派な特徴があります。

第一に、昨年は初回であったため、プログラムの準備は日本でも（また韓国でも）ほぼすべて日韓プラットフォームの事務局の中に設置された「ユース部会」のメンバーによって準備が進められました。しかし、今年の場合は、昨年のプログラムに日本から参加された青年の皆さんがユース部会とは別個に青年実行委員会を組織し、ユース部会と連携しながら、今年のプログラム作成をはじめとする準備に積極的に関わってくださいました。

第二に、今年2023年は関東大震災100年の年となり、100年前に起こった朝鮮人・中国人虐殺事件がプログラム全体の中で取り上げられるい

くつかのフォーカスの中で、大きな位置を占めているということです。このテーマは、来日される韓国からの青年にとっても、日本側の日本人や在日韓国人の青年にとっても、植民地支配の歴史と共に、国家と民衆の責任とは何かについて学び、分かち合い、それぞれが深く考えていく上で大きな意味をもっていると思います。

このように重要なテーマをめぐり日韓の青年が出会い、交わり、分かち合う中で自分を見つめ直しながら、歴史に真摯に向き合いつつ日韓の真実の和解と平和の道を展望していける関係が新たに形成されていくことこそが、日韓プラットフォームの最重要課題の一つと私は考えます。

皆さまのワクワクする時間、また素晴らしい経験が紡がれ、一人ひとりの健康が守られながら、5日間のプログラムが進行していきますことを心から祈念しています。

なお、今年の「ユース平和フォーラム」のために昨年に続き多額のご支援をくださった庭野平和財団と、今年エキュメニカル協働基金のご支援をくださった日本キリスト教協議会（NCC）には心より感謝を申し上げます。

韓国人被爆者問題から日韓の歴史を考える

——和解と非核平和のために——

小田川 興（在韓被爆者問題市民会議代表／元朝日新聞編集委員）

I 韓国人被爆の歴史的背景と被爆状況

（１）韓国人被爆者の数

1945年8月6日広島、同9日長崎に米軍が投下した原爆で、多くの韓国・朝鮮人が被爆した。その正確な被爆者数は、日本政府が原爆被爆者の全体調査はおこなっていないため、いまだに不明のまま。

1972年に韓国原爆被害者援護協会（現、韓国原爆被害者協会）がまとめた「韓国人被害状況」（推計）によると――

◇広島5万人／長崎2万人 計7万人

うち死者4万人

◇解放後の帰国者2万3千人／日本残留7千人

これは、内務省警保局の1944年末調べによる在住朝鮮人数から推計したものである。

なお、韓国政府の対日抗争期強制動員被害及び国外強制動員犠牲者等支援委員会による「広島・長崎 朝鮮人の原爆被害に関する真相調査」報告書（2010年）も、同協会の資料を引用している。

ここに見るように、韓国人被爆者は日本人被爆者総数（69万1500人）の約1割を占めている。

（２）日本による朝鮮植民地支配の軌跡

1910年 韓国強制併合

1912年 土地調査令公布

☆1919年 3・1独立運動

1923年 関東大震災～朝鮮人虐殺

1938年 国家総動員法公布

1939年 朝鮮人強制連行始まる

1940年 創氏改名

1944年 朝鮮徴兵制実施

（３）韓国人被爆者の足跡

韓国人被爆者は3つのケースに分けられる。それぞれの被爆者の足跡を記す。

①徴兵

郭貴勲さん＝1924年生まれ。「問うなかれ甲子生」。1944年、全州師範在学中に朝鮮徴兵1期生として広島の西部第2部隊に入隊、幹部候補生。爆心から約2キロの工兵隊で被爆。韓国原爆被害者協会の創設に参加、のち会長。2022年逝去。

②徴用

金順吉さん＝徴用令で釜山から三菱長崎造船所に。爆心から約3キロで作業中に被爆。寮で密かに書いた日記を携え帰国。1992年、日本政府と三菱重工業を相手に未払い賃金と慰謝料の支払いを求めて提訴し敗訴。94年、戦時中の厚生年金脱退手当を国に請求し、当時と同額の35円を受給。98年肺がんで逝去。

③植民地下で生活基盤を失い、やむなく渡日

李鍾根さん一家＝父親は島根県、のち広島県下で炭焼き。李さんは尋常高等小卒後、国鉄機関区に就職。爆心から1.5キロで被爆。2012年からピースボートで証言。民団の被爆者対策特別委員長。22年、平和式典のメッセージを市から削られ、怒りを抱え逝去。

II 帰国者たちの苦痛と訴え

解放後帰国した被爆者たちは「三重苦」にあえいだ。

1. 原爆後障害＝放射能の内部被ばくによる原爆後障害のため身体が弱く、継続して働くことが難しい。

2. 健康悪化による生活苦＝「ぶらぶら病」といわれた症状を抱えて困窮した。

3. 日常生活で偏見と差別の対象＝解放後の韓国社会では「原爆が祖国解放を早めた」という見方が強い中、原爆症に関する情報が乏しいため、被爆者の苦痛が理解されにくい状況から、同胞の苦しみに関心が薄かったことがその背景にある。被爆者たちは韓国社会から「疎外」されて苦しんだ。

III 東西冷戦下、切り捨てられた韓国人被爆者

私は1968年、韓国人被爆者の取材を始めた。

1960年代の世界は米ソ冷戦のただ中にあった。1960年には新・日米安保条約が発効して「日米韓」同盟関係が強化された。

ベトナム戦争が激化するなか、韓国は1965年10月からベトナムに戦闘部隊の派遣を開始。73年までの派兵は延べ31万人にのぼった。

1965年、米国に背中を押された日韓両政府は国交正常化に踏み切った。これは韓国人被爆者救済の機会となるべきだった。しかし、国交正常化で締結された日韓条約の請求権及び経済協力協定で、日本は無償3億・有償2億、計5億ドルを韓国に供与することによって請求権問題は「完全かつ最終的に解決」済みとされた。

韓国人被爆者は日韓両政府から切り捨てられた。

私の韓国取材で、韓国政府の担当者は「朝鮮戦争の犠牲者に加えてベトナム派兵の犠牲者の救護で手一杯だ」と答えた。

日韓の歴史問題が清算されない事態の根源は1951年のサンフランシスコ条約にある。同条約で、日本は米国主導の世界秩序に組み込まれ、対共産圏の防波堤として経済復興を優先させるため、連

合国からの賠償請求を免れた。他方、朝鮮半島や中国に対する植民地支配と侵略の責任は不問にされたのだった。

IV 韓国被爆者が自ら組織を立ち上げ

日韓政府から突き放された韓国人被爆者たちは自ら立ち上がって新聞、ビラなどで韓国社会に窮状を訴え、1967年7月、「韓国原爆被害者援護協会」(のち「韓国原爆被害者協会」)を設立した。

これに対してキリスト教会系の指導者らが支援の輪をつくった。韓国教会女性連合会の孔徳貴さん(尹潽善大統領夫人)、李愚貞さんらが奔走した。また、釜山福音病院が被爆者を受け入れて医療支援をした。

韓国の動きに呼応して、日本でもキリスト教関係者と市民が連携し被爆者支援の取り組みがスタートした。

1970年から関西を中心にキリスト者らが市民と共に韓国人被爆者支援へ動いた。とくに大阪・神戸、東京のキリスト者たちは植民地下の1919年に3・1独立運動を弾圧した日本軍が教会もろとも住民を焼き殺した「堤岩里事件」への謝罪と教会再建運動を展開していたメンバーだった。

V 孫振斗さん救援で日本の市民団体が連携

1968年に釜山在住の被爆者・孫貴達さん、70年に兄の孫振斗さんが「原爆症治療」を求めて相次ぎ日本へ密航してきた。

孫さん兄妹は広島で家族とともに被爆した。貴達さんは密入国容疑で逮捕後、被団協などの救援運動で広島原爆病院に入院したが、強制送還された。孫振斗さんは解放後、1951年に外国人登録令(未登録)で強制送還されて釜山で暮らした。しかし白血球減少の診断を受けたため、原爆後遺症を恐れて、治療を求めて1970年12月、佐賀県串浦港に密入国したが、福岡刑務所に収容された。

1971年8月6日「<孫さんに治療を！>全国市民連合」が発足し、広島、東京、大阪、福岡、長崎などで救援運動が広がった。在韓被爆者問題

に対する国家責任に関心を強めるグループが共闘態勢を組んだ。

同じ8月、のちに韓国原爆被害者協会会長を務めた辛泳洙さんが来日した。辛さんは大阪で韓国人被爆者支援の市民集会に出席し長崎の被爆詩人・福田須磨子さんと握手。日韓被爆者連帯の一步が踏み出された。

VII 裁判闘争が国家補償への道開く

1972年、孫振斗さんが被爆者健康手帳を求めて提訴した。孫さんは78年、最高裁で勝訴した。判決は「原爆医療法は社会保障と国家補償の性格を併せ持つ」とし、内外の被爆者に対する「国の戦争責任」を明示。旧植民地出身被爆者への補償は「国家的道義」とした。

この画期的な判決を受けて、日本政府は治療目的で来日の在韓被爆者に対する被爆者健康手帳交付に踏み切った。

1974年7月、ケロイドの手術のため来日した辛泳洙さんが被爆者手帳の交付を受けて、韓国人被爆者の手帳取得第1号となった。

しかし、厚生省(当時)は同じ日、被爆者に対する特別措置法は日本国内に居住する被爆者に適用されるが、日本の領域を越えて居住する被爆者には適用されないとする公衆衛生局長通達を出した。この「402号通達」で、韓国人被爆者が渡日して手帳を取得しても、国外に出たら失効して援護が打ち切られることになった。いわゆる「属地主義」の厚い壁だった。

しかし1998年、郭貴勲さんが「被爆者はどこにいても被爆者だ」と、大阪地裁に「402号通達は違法」との訴えを起こした。判決はこの通達が「人道的見地から被爆者救済を図る援護法の趣旨に反する」と指摘。2002年、大阪高裁でも勝訴して国は上告を断念し、「属地主義の壁」が崩された。

2007年には、元三菱徴用工被爆者46人が国と三菱重工業に対して強制連行・労働への損害賠償などを訴えた裁判で、最高裁は「402号通達で精神的被害を受けた」として在外被爆者訴訟で初の

国家賠償を認めた。だが、強制連行の違法性は認めたものの、「請求権は消滅した」と三菱重工業などへの損害賠償請求は退けた。

このように韓国人被爆者が市民団体の支援を受けた裁判闘争が日本政府による国家補償への道を開き、在外被爆者に対する被爆者援護法適用が実現した。さらに長年の裁判闘争の結果、2008年、被爆者援護法の改正によって在外被爆者が来日せずに被爆者手帳の申請が可能になった。

VIII 国家の責任追及へ怒りの連帯

1971年12月、大阪で「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」が発足した。

1978年3月には「<孫さんに治療を！>全国市民連合」の支援を受けた孫振斗裁判勝訴が援護の道を開き、運動拡大の転機をつくった。

市民たちの運動に押されるように、日韓両政府は韓国人被爆者の渡日治療に踏みきった。1980～86年に349人が広島、長崎の病院で治療を受けた。しかし、これは恩恵的な処遇に止まった。

1996年、日本政府の「人道的」支援で、韓国原爆被害者協会の登録被爆者の約半数が住む「韓国のヒロシマ」陝川に韓国原爆被爆者福祉会館が建設された。

1988年、東京で「在韓被爆者問題市民会議」が発足。ブラジルの日系被爆者たちと連携して被爆者支援を続けてきた。

しかし、日本政府による在韓被爆者援護の課題は少なくない。最も求められるのは被爆者援護法の完全で平等な適用だ。例えば、いまは助成事業として看病人の費用の一部補助に止まる「介護手当」の支給だ。

日本政府の被爆者援護に求められる「3つのほしょう」、すなわち過去への「補償」、現在の「保障」、未来の「保証」の実現は急務である。

IX 韓国憲法裁判所の決定で新たな展開

2011年、韓国憲法裁判所は韓国人被爆者・元慰安婦の賠償請求権が請求権協定で消滅したか否かに関する日韓の解釈上の「紛争」を解決しない

韓国外務省の「不作為」は違憲だとする決定を下した。「侵略戦争国であり、非人道的な差別国」の日本に「責任を問う」とする。

韓国大法院は 2012 年、植民地支配に直結した不法行為による損害賠償権は請求権協定の適用対象外として、元三菱徴用工被爆者らに対する日本企業の損害賠償責任を認める判決を下した。

2019 年、三菱重工長崎造船所に強制動員された韓国人被爆者 3 人が被爆者手帳の却下処分の取消しを求めた裁判で、長崎地裁は処分取消しと手帳交付を長崎市に命じた。しかし、90 代の原告 3 人は病気や体調不良のため来日できなかった。

韓国政府は 2016 年、「原爆被害者支援特別法」を制定した。医療支援、被爆 1 世・2 世の健康・生活実態調査、記念事業を展開する一方、証人探しは困難だという課題も残る。

X 核兵器禁止条約が開く「非核平和」

2021 年 1 月、核兵器禁止条約の発効で「核なき世界」へ大きく前進した。

核兵器禁止条約の発効に郭貴勲さんは「誠に喜ばしい限りです」と強い感慨を述べた。

☆韓国被爆者運動を主導してきた辛泳洙・郭貴勲さんは「核が地球上からなくなる限り、私たち被爆者は救われない」と訴えていた。その悲願に核禁条約発効は大きく一歩近づいた。

核禁止条約発効を受けて日韓・ブラジルの被爆者団体が日韓・北朝鮮などに核禁止条約の批准を求める声明を出した。これに賛同する「市民の会」「市民会議」「在ブラジル・在アメリカ被爆者を支援する会」が共同声明を発した。

中満泉国連事務次長・軍縮担当上級代表は「市民会議」に対して、「核なき世界へ共に努力」とのメッセージを送ってきた。

日韓和解と平和プラットフォームは今年 8・15 共同声明で次のように訴えた。

「日本と韓国は平和をめざす和解と協力の先頭に立って、核兵器も核の脅威もない世界をつくるために努力しなければなりません」。具体的には「日韓及び関係国政府は朝鮮半島の非核兵器地帯化の実現に努める」「日本政府の核兵器禁止条約への加盟を求める」。

XI 未来へ——「核なき世界」を拓く礎に

平岡敬・元広島市長は核禁止条約に基づき「国連に『核被害者救援基金』を創ろう」と提唱している。すべての核被害者の救援こそが、核抑止論の虚妄を明らかにし「核なき未来」を開くカギである、と。

学生・市民が非核平和運動の輪を広げている。例えば、「日韓誠信学生通信使」交流は 2009 年から広島・韓国スタディツアーを 11 年、12 回実施し、日韓の大学生・市民約 2000 人が参加した。韓国人被爆者問題を解決することは、歴史の教訓を未来に活かし、核廃絶の実現に向けて日本が主導的役割を果たす道を開く。それは核の惨禍を継ぐ韓国の被爆二世・三世たちの願いでもある。

残された課題は。北朝鮮の被爆者援護である。1911 人が「朝鮮被爆者協会」に登録していたが、2018 年に生存が確認された被爆者は 110 人に減少した。

日本政府は 2001 年、北朝鮮に被爆者調査団を派遣し、被爆者たちは補償・謝罪を要求したが、日本政府の援護は「ゼロ」である。日朝間の「国交の壁」が被爆者援護の道を閉ざしている。

「文科省前」金曜行動とは

●佐野通夫

在日朝鮮人は、1945年の解放後に植民地下で押さえつけられた民族教育を再開し、民族の言葉、文化を取り戻そうとしました。日本政府は、その直後から朝鮮人が自ら設立した朝鮮学校に圧力を加えます。2023年は1948年の学校閉鎖令に対抗した「4・24教育闘争」から75年になります。

1965年の日韓条約後、朝鮮学校は再び「外国人学校法案」という形で圧力を受けます。しかし、この当時は、人びとの理解を受け、「外国人学校法案」は廃案となり、90年代にかけて、自治体からの補助金が支給されるようになり、スポーツ大会への参加、通学定期の割引など、朝鮮学校は社会的認知を受けるようになります。

しかし、2010年度から実施された高校授業料無償化措置（2014年から「高等学校等就学支援金制度」）において、外国人学校の中で朝鮮学校だけが適用されないまま、2013年に文部科学省令が改められ、朝鮮高校は適用の申請すらできないようにされました。全国10校の朝鮮高校の内、大阪、愛知、広島、福岡、東京の5つの朝鮮高校の生徒・卒業生たちが原告となり、「無償化」排除の不当さを裁判で訴えました。大阪地裁が朝鮮学校の訴えを認めた完全勝利判決を出した以外は、高裁も不当判決が続き、この不当判決は最高裁で確定しました。

「金曜行動」は、2013年5月31日、原告も含まれる朝鮮大学生が始めました。全員寄宿制の朝大生は、夏冬の長期休暇には帰省し、「金曜行動」も休みとなります。そこで、2015年7月17日から朝大生の長期休暇中には大人たちが「朝大生に続く勝手に金曜行動」として、金曜行動を継続するようになりました。朝大生による金曜行動は

2020年2月21日の（朝大生主催だけの）第200回で、コロナの影響もあり、いったん休止となりましたが、大人たちによる「勝手に金曜行動」として継続し、2023年9月1日には第487回となります。

この間、文科省による「無償化」外しに起因して、各地の自治体で住民が作ってきた補助金を首長が勝手に廃止、減額する事例が継続しました。2019年10月1日からの幼保無償化においては、朝鮮幼稚園だけの排除でなく、ブラジル学校などの各種学校である外国人幼稚園がまとめて排除されました。また、コロナ対策の一環である「学生支援緊急給付金」の制度からも朝鮮大学校が排除されました。

幼保無償化については、さまざまな批判と要求から、2021年度、文科省が「地域における小学校就学前の子どもを対象とした多様な集団活動事業の利用支援」の制度を設けました。これは幼保無償化制度から排除された幼児教育施設を対象にしようというものです。しかし、居住する市区町村が必要と認めなければ支給対象とならないことから同じ施設（例えば同じ朝鮮幼稚園）に通う子どもでも居住地により支援の対象にならないという制度設計自体が不平等で問題の多い制度です。

2023年4月1日から「こども基本法」が施行されました。この基本法の目的は、こども家庭庁が作成したパンフレットに「すべてのこどもや若者が将来にわたって幸せな生活ができる社会を実現するため、こども基本法が作られました」と書かれているとおりです。日本国内で生きるこどもたち全てが、差別なくとりあつかわれなくては

なりません。しかし、上に述べたとおり、朝鮮学校に通う子どもたちは、幼稚園から大学まで、差別的に取り扱われてきました。

日本政府の朝鮮学園に対する不当な差別は、朝鮮学校への「ミサイル発射を止めさせろ」などの嫌がらせの電話、赤羽駅構内での「朝鮮人コロス会」などの落書きに見られるヘイトスピーチ、ヘ

イトクライムを引き起こす要因となり、日本社会に求められる「多文化・多民族共生社会」構築に大きな障害となっています。東北アジアの平和にむけて、日朝国交正常化にむけても、国内における差別撤廃と植民地支配から引き起こされてきた差別意識の払拭が求められます。